



1_WALL

第10回写真「1_WALL」展

2014年3月24日(月)~4月17日(木)

公開最終審査

2014年4月3日(木) 18:00~22:00

FINALISTS ※五十音順

阿部夏澄 小池裕也 茶谷真以 水島貴大 山下達哉 若山忠毅

Grand Prize REPORT
Photography

受賞作

『Decontamination—(除染)』

人の手によって元に戻すことのできない地の存在や
消すことのできない記録や記憶を
写真によって深く意識しようとしている。

第10回写真「1_WALL」グランプリ

山下達哉 | Tatsuya Yamashita

社会的な問題を投げかけながらも、作者自身の
感覚がにじみ出た作品が接戦を勝ち抜きグランプリに。



山下達哉 Tatsuya Yamashita
1982年生まれ
福井県出身



第10回写真「1_WALL」公開最終審査REPORT

2014年4月3日(木) 18:00~22:00

会場/ヒューリック銀座7丁目ビルB1 セミナールーム

JUDGES/鷹野隆大(写真家) 土田ヒロミ(写真家) 姫野希美(赤
々舎代表取締役、ディレクター) 増田玲(東京国立近代美術館主任研
究員) 町口覚(アートディレクター、パブリッシャー)〈五十音順、敬称略〉
進行:菅沼比呂志(ガーディアン・ガーデン プランニングディレクター)

展示会場の壁一面には、ファイナリストたちの個性が光る6つの作品が
展示されている。それらを各審査員が真剣なまなざしで、一つひとつ入
念にチェック。「1_WALL」展のグランプリを決める公開最終審査がい
よいよ始まった。ファイナリスト6名が一年後の個展開催の権利をかけ、
自作品の説明や個展プランを自分の言葉でプレゼンテーション。会場い
っぱいの一般見学者が見守る中、5人の審査員による議論の末に第10
回となる写真「1_WALL」のグランプリが決定する。誰のプレゼンテー
ションが審査員の心を打つのか、誰の作品が頂点に達するのか。





小池裕也 Yuya Koike

『pin HOLE』



この作品は、風景を写真へ変換していくことから始まった。見返すうちに、4つの小さな穴に気づく。「こちら側にあるカメラ」「向こう側にあるカメラ」「こちらと向こうを繋ぐ穴」「人間の瞳」の4つだ。それをビジュアル化したらどうなるか、展示で表現してみた。

〈質疑応答〉

- 菅沼：ポートフォリオではひとつのイメージに1枚ずつの写真だったが、今回の展示では4つになっている。これはなぜ？
- 小池：同じ場所で撮影していて、視点は動かさず視界や風景だけがどんどん変わっていくところを表現したかった。
- 土田：クリエイティブな新しい作品。しかし、展示方法や大きさなどを見るとやりすぎた感じもあるが？
- 小池：後悔のないようにやりたくて、与えられた壁一面を精一杯使った。

1



若山忠毅 Tadakata Wakayama

『透き間』（スキマ）



東京近郊の田園と都市の中間に位置する空間、自然と人工物を分ける衝立のような空間を撮った。そこは主体が人間でも自然でもなく、場所と場所の境界にある「透き間」。そんな世間の間的な場所を捉えることが重要だ。個展では、三里塚を撮影した作品を展示したい。

〈質疑応答〉

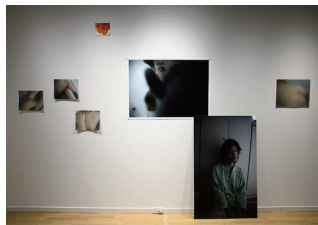
- 姫野：三里塚に行きたいと言っていたが、なぜ？
- 若山：写真を撮っているうちにいろいろなことがわからなくなり、まずは気になる場所からと思った。三里塚へ行って、自分が求めていることは何なのか、最終的に決断したい。
- 菅沼：ポートフォリオの写真の中から、なぜこの4枚の写真を選んだの？
- 若山：展示スペースは限られているし、ポートフォリオだと雑多でわかりづらいと思ったので、象徴的な写真を4枚選んで並べた。

2



阿部夏澄 Kazumi Abe

『u』（ユウ）



これは、私がある一人の女性に対し恋に落ちていく過程の中で撮っていった作品。これらの写真と向き合うことは、人物を撮るということを考えさせられるだけでなく、目を背けてきた私のセクシュアリティと向き合う作業になった。

〈質疑応答〉

- 菅沼：ポートフォリオとギャップを感じた展示だったが、床に置かれた彼女の写真パネルや、たゆませた写真はどういう意図で展示したの？
- 阿部：パネルは彼女がそこに座っているように見せたくて置いたもので、たゆませた写真は、当時ほど記憶が残っていない自分の心境の変化を表現したかったから。
- 町口：パネル写真以外のぼやとした写真は、どういった基準で選んだの？
- 阿部：私が撮った写真と彼女が撮った写真があり、それぞれの視線を感じてもらいたくて、これらを選んだ。

3



茶谷真以 Mai Chaya

『sample』（サンプル）



これまでの写真作品は、写真家が思いを込め鑑賞者がそれを写真から汲み取るという、対象としての写真だった。私は鑑賞者自らイメージや思想を獲得してもらいたく、撮影した写真を加工して作品を生み出した。着地点ではなく、起点となる作品をつくりたい。

〈質疑応答〉

- 鷹野：撮った写真を加工して展示したのは、そのままでは伝わらないと思っている？
- 茶谷：そうは思っていない。作品を着地点にするのではなく、先へ進めていきたい。
- 町口：展示作品はぱっと見た時に写真ではなくなりましたが、どういった構図なの？
- 茶谷：台の上の手帳の写真は壁に展示した作品を写したもので、過去。手帳が現在。それを見ている鑑賞者が未来。写真がそこにとどまるのではなく、流れを表現したかった。

4



水島貴大 Takahiro Mizushima

『未来 SOUND』



一人の女性を連続して撮影した写真を中心につくった作品。前触れのない行動を繰り返す彼女主体の撮影の中、今を残したいという彼女の写真への欲求を感じた。その瞬間的なエネルギーを無視することができず、作品として仕上げた。

〈質疑応答〉

- 町口：ポートフォリオでは性器が写るものがある、今展示では制約のため写真をトリミングしたようだが、そうしなければいけないということに対してどう考えているの？
- 水島：エロスや性は出したい。なので、制約の範囲内での展示方法を考えた。
- 姫野：個展では群像作品にし、中心は彼女でいこうと言っていたが、それはなぜ？
- 水島：彼女の写真は僕にとってある意味、作品創造のシンボルのような存在。今はこの写真からどういう風に作品を仕上げていこうかと考えている途中。

5



山下達哉 Tatsuya Yamashita

『Decontamination—(除染)』



福島で行われている除染作業を撮影した写真と、自分自身が土を掘り起こす行為を行った写真を並べた作品。テレビで除染作業の映像を見た時、掘り起こしても消えないものを消していくような作業に感じた。今後はもう少しスケールを大きくして撮影していきたい。

〈質疑応答〉

- 土田：すべてモノクロ写真だが、あなたは単純にモノクロが好きなの？
- 山下：カラー写真は現実的に見えて飽きてしまうが、モノクロは繰り返して見た時に多様なイメージを得られると思っている。単純に好きだということもある。
- 鷹野：あなた自身が土を掘り起こした写真も福島県で撮ったもの？
- 山下：はい、飯館村です。土の写真はどこで撮っても変わらないが、疑問を投げかけることで、除染という問題が身近になるのではないかと考えている。

6

■ 審査員の感想

「いつになく白熱した質疑応答で1時間ほど時間が押していますが……」という菅沼の言葉で、いよいよ審議ははじまる。まずは、今回の「1_WALL」展の全体的な感想を審査員一人ひとりに聞いていくことに。増田さん：「展示にチャレンジした結果、的を外した展示があり、一次、二次審査のときに感じた魅力が伝わってこなかった」。鷹野さん：「展示方法が残念だと思うものが多かった。余計な策を弄せずに、もっと写真だけで勝負してもいいのではないか」。町口さん：「ポートフォリオには共感したが、展示だと別物になってしまっている。作品の見え方を考えることはとても大事」。姫野さん：「それぞれに写真との向き合い方が違って面白い。展示には、肩すかし感もあった」。土田さん：「作品が多様化してきている。どれをグランプリに選ぶか迷う」。

続いて、ファイナリスト一人ひとりについての感想を聞いていく。

○小池さんの作品について。鷹野さん：「ポートフォリオは面白かったのに、展示ではそれを図解するような形になってしまい、残念」。町口さん：「二次審査の時にスマートフォンで見せてもらった写真が面白くて強さを感じていたのだが、解体しすぎてしまった」。増田さん：「何が面白くて誰に見せたいのか。自分中心になってしまい、その視点が抜け落ちている」。土田さん：「彼は、自身の作品を見返すうちに次々とイメージが湧いてくるクリエイティブな人間。しかし、プレゼンテーションでは説明しすぎた」。姫野さん：「二次審査での強さが薄れ、展示では違う作品になってしまった」。

○若山さんの作品について。鷹野さん：「個人的に好きな作品。写真だけで勝負しているところもいい」。土田さん：「脱・表現という風に言っていて、意識的に表現をしようとしていないところもいい」。町口さん：「展示写真のチョイスが限定されすぎている。ポートフォリオにはもっと多様な写真があるのもったいない」。増田さん：「作品自身も、“透き間”というタイトルもセンスがよく、かなり評価している。三里塚という場所を撮ることに、期待しているのかは悩みどころ」。姫野さん：「個展では三里塚で撮った作品をということだが、つながりがよくわからない」。土田さん：「今の作品では不十分な印象。完成度を上げることがカギ」。

■ 審査員による投票

ファイナリスト一人ひとりに対する感想を聞いた後で、各審査員にそれぞれグランプリ候補を2人発表してもらうことに。結果は……

鷹野／若山 茶谷
土田／茶谷 山下
姫野／阿部 水島
増田／若山 山下
町口／水島 山下

集計すると、若山2票／阿部1票／茶谷2票／水島2票／山下3票

票が散らばったため、2票以上獲得したファイナリストについて、それぞれ票を入れた審査員に推すポイントを聞く。まずは、若山さんについて。鷹野さん：「三里塚の写真を見てみたいという意地の悪い期待から」。増田さん：「あっけらかんと三里塚を視野に入れていますと言えるところに期待」。次に、茶谷さんについて。土田さん：「結果的にとてもいい作品になっている」。鷹野さん：「他にはあまり見ない才能。期待したい」。続いて、水島さんについて。姫野さん：「彼自身に可能性を感じたから」。町口さん：「被写体の奥まで見えた。一番怖くもあり、期待」。最後に、山下さんについて。土田さん：「放射能の問題をアーティストとして表現しようとしている」。増田さん：「除染についての怒りを自分の趣味である土に近づけ、カムフラージュしている点がいい」。町口さん：「社会的な問題より何より、好きなものを撮っていることがいい」。そんな意見を踏まえながらの2回目の投票は、審査員に1人ずつ選んでもらうことになった。その結果は……若山1票／水島2票／山下2票。またしても、票が割れる。



3回目の投票では、2票獲得した水島さんと山下さんのどちらかを選ぶことに。そして、結果は……水島2票／山下3票。

最後まで大接戦の末、山下さんがグランプリに決定した。彼の名前が呼ばれ、トロフィーが渡される。「新たなスタートになりました。みなさん、これからもよろしくお願いします」と山下さんが話すと、会場から一斉に拍手が沸き起こり、最後まで観客をはらはらどきどきさせた公開審査が終了した。

阿部さんの作品について。姫野さん：「おもしろかった。展示では、ポートフォリオからの写真の選び方で、阿部さんの意図をよく表現している」。町口さん：「展示写真の選び方がよかった。阿部さんの考えの奥が見えた気がしたが、展示方法としてはどうだろう」。鷹野さん：「展示方法もよかったのではないと思う。写真と写真が重なっていたりして、細かな部分のこだわりに感動した」。増田さん：「すっきりとしているが、展示によって作者の考えが一番伝わってきた」。土田さん：「彼女と向き合うというわりには、写真の枚数が圧倒的に少なく、寄せ集めてきた印象を受けた。展示法は成功している」。

○茶谷さんの作品について。鷹野さん：「ポートフォリオは面白かったのに、展示は残念な印象。写真の力をもう少し信じて」。町口さん：「鑑賞者を巻き込むような作品をと言っていたが、今はやりたいことをもっとやってみては」。姫野さん：「ポートフォリオでは、写真自体がもたらす瞬発力を感じた。写真から発展させていくという茶谷さんの考えが少し早急すぎるのでは」。土田さん：「ポートフォリオとは違う面白さを持った、完成度の高い作品かもしれない」。増田さん：「優れた写真というものは、着地点であると同時に起点でもあるはず。もう少し写真の可能性を信じて、作品づくりをしてほしい」。

○水島さんの作品について。鷹野さん：「ポートフォリオでは彼女のイメージが伝わってきたが、展示では伝わってこなかった」。土田さん：「被写体が素晴らしい。被写体の予期せぬ行動をコントロールしなかった作者自身もまた面白い」。町口さん：「面白い作品。水島さんのプレゼンテーションも。ただ、ポートフォリオの方がよかった」。増田さん：「性器を写さないなどの制約がある中、堂々とチャレンジした作品。個展も見たいが、制限がある中でどうなるのか……」。姫野さん：「二次審査の時、とても強烈な印象を受けた。被写体の力は大きい、そういった被写体に遭遇する水島さんの才能もまた魅力的だ」。

○山下さんの作品について。増田さん：「一次、二次審査から作品展示へと進むにつれて、面白くなった」。町口さん：「除染という言葉よりも作者がとにかく土が好きだということが、ポートフォリオでも展示作品でも伝わってくる。ピュアなものを感じた」。鷹野さん：「展示に成功している。心地よく見ることができ、美しく魅力的な作品だ」。姫野さん：「彼はこの先も、確実に作品を安定してつくっていけるだろうという安心感がある。しかし、その収まる感じが逆に物足りない印象も」。土田さん：「土が好きだということから始まり、それを放射能問題に繋げた、今までにない作品だ。ぜひ、世界へ飛ばたいってほしい」。

■ 出品者インタビュー

■ 小池裕也さん

展示したら、ばらばらな印象になったと指摘されたが、自分ではそれまで全く気付かなかった。今回の審査ではそういう意見をたくさんもらえ、刺激を受けた。これからは、写真は撮り続けていきたい。鑑賞者の視点を考えるというのが、これからの僕の課題です。

■ 若山忠毅さん

審査を終えて正直なところ、ホッとした。自分は写真を始めてまだ4年。他の方の作品に驚いたし、勉強になった。三里塚の写真を撮りたいと言った時の、いい意味でも悪い意味でも期待しているという審査員の方の言葉をありがたく受け止め、頑張っていきたい。

■ 阿部夏澄さん

「1_WALL」に挑戦したのは3回目。今までで一番、写真と向き合うことができた。曖昧さがいいという意見と、逆に深刻さが伝わってこないという意見、両方を取り入れていきたい。「1_WALL」には作品の方向性を見失うような時が来たら、もう一度挑戦してみたい。

■ 茶谷真以さん

ファイナリストのみなさんの作品がそれぞれ素晴らしかったし、審査員の方の言葉一つひとつが心に刺さるような刺激的な審査だった。あなたはパフォーマンスだねと言われていたので、これからは写真だけにこだわらず、いろんなことにチャレンジしていきたい。

■ 水島貴大さん

グランプリに届かなかったことは悔しいが、どっちにしても消去法でこのような結果になっていたのだと思う。いい被写体に出会えることはそうない指摘していただいたことなどをしっかりと心に留め、作品もプレゼンテーションも、もっと突き詰めていきたい。

■ 山下達哉さん

まずは、結果的にグランプリという評価をいただけたことに感謝します。他の方の作品も多様性がある、面白い審査だった。一年後の個展についてはまだ具体的なことは決まっていません。ただ、自分の好きなものを自分の視点で撮り続け、多くの方に何かを感じていただけたらと思っています。

〈文中一部敬称略 取材・文／金子摩耶〉

■ お問い合わせ先

株式会社リクルートホールディングス ガーディアン・ガーデン
〒104-0061 東京都中央区銀座7-3-5 ヒューリック銀座7丁目ビルB1F
TEL:03-5568-8818 FAX:03-5568-0512 <http://rcc.recruit.co.jp>
Twitter:@guardiangarden Facebook:facebook.com/guardiangarden.tokyo

Guardian
Garden

RECRUIT